



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	翻刻『万代大雑書古今大成』（十三）
Author(s)	伊藤, 孝行; Ito, Takayuki
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 76, 1(右)-11
Issue Date	2023-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89040
Type	departmental bulletin paper
File Information	76_04_Ito.pdf



《翻 訳》

翻刻『万代大雑書古今大成』（十三）

伊 藤 孝 行

《要 旨》

本稿では、『万代大雑書古今大成』（読み…ばんだいおおざっしょここんたいせい）の翻刻の一部を掲げる。『万代大雑書古今大成』は天保年間に発行され、明治に入り改訂版が刊行された。内容は、生活するうえで必要なことが記してある便覧である。それゆえ、古くから伝わる習慣から占星術、名付けの際の留意点等々、多岐にわたる内容となっている。

『万代大雑書古今大成』は、管見のかぎり今のところ翻刻されていない。近代日本語資料の一として、また近代に於ける日本の習慣や風俗についての資料として、一定の価値はあろう。本稿では伊藤（2022）に続き、「こ二十一」より「て八」まで掲げる。

キーワード…近代語、翻刻、万代大雑書古今大成

SUMMARY

Reprinting: “Bandai Ozassyo Kokon Taisei” (13)

This paper presents a part of the book entitled “Bandai Ozassyo Kokon Taisei”, which was first issued in the Tenpo Period (1837-1858), rewritten in present-day Japanese [characters]. It is a guide book describing the particulars of daily life at the time. It ranges widely over many themes, from traditional customs and astrology, to the points to note in naming children. Although “Bandai Ozassyo Kokon Taisei” is a printed book, and has had a revised edition issued in the Meiji period, it has not been translated into modern characters before, to the author's knowledge. As one of the sources of modern Japanese and also as a material describing Japanese manners and customs of the past, it is of indisputable value. An abstract from the book, together with the title, colophon and preface, are reproduced here. This paper reprints the Chapters Ko-21 - to Te-8 in Ito (2022).

／
2
＞

KEYWORD : Modern Japanese, Reprinting, Bandai Ozassyo Kokon Taisei

凡例

- ・漢字の表記は、通行の字体に改めた。
- ・割注は へ へ で示した。割注中の改行箇所は 〳 で示した。
- ・● は翻刻しかねた箇所である。今後の課題としたい。

こ二十一 曆の中段によつて万の吉凶金銀出入病人善悪医師を求る方角の事

○開の日ハ金銀貸借の対談にハ用ゆべからず婚禮養子又旅立にハ用ゆべし吉日也居所を定め家うつりにわろし遠方へのたよりハ早速届く待人来る病人ハ重し医者を求めるにハよし失物走者ハ出る事をそし穀物を初相場有て動く物跡下りの日也此日朔日にある時ハ一月の勢同跡下り也開くひらくと二日つゝきたる時にハ初のひらくの日ハ変じて跡あがり次のひらくの日ハ大に下るなり

○閉の日ハ金銀の貸借対談家うつり此分に用ひて成就す婚禮養子旅立に用ゆべからず遠方のたよりハ悪し待人ハ来らず病人ハかるしうせ物ハ尋ぬべし置忘れあり走者も遠く行ずして中途に滞居る也医者を求めるにハわろし穀物を初め相場ありて動くもの跡あがりの日也此日朔日にある時ハ一ヶ月の勢同じく跡上り也閉閉と二つづきたる時ハ初のとづハ下り二日目のとづハ上り扱又とづとづと二日つゝきたる三日目ハ何の日にても弥上り也

○建の日ハ金銀貸借対談家移婚禮養子旅立遠方の便此分何れも用ゆべからず待人ハ来る病人ハかるし医者を求めるに大吉也失物ハ散うせ年に入らず又走り者ハ遠くへ行併早く求めバ手に入事有延引せハわろし穀物相場有て動く物此日初の相場前日より下るときハ愈跡下り

又前日より上り初め高ければ弥跡上り也此日朔日に有時ハ一ヶ月のいきほひ朔日におなじ事也建建と二日つゝきたるときハ二日めのたつの日ハ初めのたつの日のうらを行相場と心得べし

○除の日ハ金銀貸借対談家うつり婚禮養子旅立とう其外遠方へ便などハよし但し対談ハ決しがたし待人来る病人ハよしうせもの出る事なし散失る也はしり者遠く行て帰る事なし医者を求めるにハ大吉日也穀物をはじめ相場ありて動く物跡下りの日也此日朔日に有時ハ一月の勢下同下り也除除とふつかつゝきたる時ハ二日共下り也一体下り相場るときに此日二日つゝけバ大下り也さなくとも少しハさがるなり

○満の日ハ金銀貸借対談家移婚禮遠方のたよりに用ゆ養子旅立に用ゆべからず待人来たらず病人重し医者をもとむるにハ吉日也うせ物ハ出がたしはしり者も同じ事也穀物相場ありてうごく物平にして高下なし尤動ざる日也朔日に此日のあるときハ一月のいきほひ同じく少なき相場と心得べし満ミつと二つづきたるときハ二日めのミつハ少し跡下りと心得べし水の廻其なりに相場すハる物なり

○平の日ハ対談家うつり婚禮養子此分に用ゆべし金銀出入の対談に用ゆべからず旅立によし待人来れとも遅し病人ハかるし失物ハ盗ミかくしたるにてもなく其家に有ども出る事をそしよく尋ぬべし出る也医師を求めるによし遠方の便をなすにハ悪し相場ありて動物少し跡下り也

○定の日ハ対談家移婚札養子旅立此分に用ひてよし

金銀貸借の対談にハ用ゆべからず遠方へ便にハわろし待人をそく来る病人ハ重しうせ物ハ人の手を越て有遠きにあらざ走り者ハ隠れて近きにある医師を求るにハ吉日也穀物相場ありてうごく物或ハ高くあるひハ安く高下持合の日なり

○取の日ハ対談家移婚札養子旅立金銀貸借遠方便り

何れも用ひてよし待人早速来る病人ハかろし失物ハ人の盗ミたるにてもなく只置わすれしたる也されバ尋れば出べし走り者捨おけバあの方より帰る医師をもとむる

にハよし穀物相場ありて動くものハ大に上る日なり

○破の日ハ対談家移婚札養子旅立金銀貸借遠方へた

より此分用ゆべからず成就せず病人ハ命恙なしといへ共長病也うせ物尋ても求難し走り者ハ随分油断なく早く尋ぬべしをそくてハ其身を失ふ災ひあり医者を求るにハ大吉日也穀物相場ありてうごく物ハ一日の初の相場甚よハく見えて存寄らず跡上りの日也

○危の日ハ対談家うつり婚札養子遠方の便此分に用ゆ

べからず金銀貸借の対談によし旅立にハ悪し用ゆべからず待人来るやまひハかろし失物走者ハそのうしなひたる主の推量に違はず一刻も早く求め出すべし医者を求るにハ大悪日也穀物相場ありてうごくもの此日ハ上ら

んとしてハ下り下らんとしてハ上り終日如此の相場なり

○成の日ハ対談家移婚札養子金銀貸借旅立遠方へ便

残らず用ひて大によしまち人をそく来る病人ハ太切なりうせ物ハ尋ても此日出がたし走り者ハ随分油断なく求べし深くかくれ居る也穀物相場ありて動くもの其前に随ひて分る日なりたとへバ前より段々上り来る相場なれば此日を上りの終りと知べし

○納の日ハ対談家うつり婚札養子などに用ゆべし旅だち

にハ用ゆべからず遠方へ便悪し金銀貸借の対談にハかたく用ゆべからず病人ハ平なりまち人來らず医師を求るにハ大吉也失物ハ尋ぬべしすミやかに出る也走り者をそけれ共ひとり出る穀物相場ありてうごく物一日の相場の初より跡へ戻らずして下りの日なり

こ二十二 古人名家名僧年数【但天保九年迄】

しやかによらい 二千七百八十六年

日本武尊 千七百二十八年

武内大臣 千四百五十一年

しやうとく太子 千三百十八年

だるま大師 千三百十五年

もりやの大臣 千二百五十二年

かまたり公 千百七十年

役行者 千百三十八年

柿本人丸	千百十五年	源為朝	六百六十九年
山辺の赤人	千八十二年	源頼政	六百五十九年
安部の仲丸	千六十七年	平清盛	六百五十八年
猿丸太夫	千六十四年	木曾義仲	六百五十六年
中将姫	同	よしつね	六百五十年
吉備大臣	同	曾我兄弟	六百四十六年
田村將軍	千二十八年	西行法師	六百四十一年
伝教大師	千二十一年	源よりも	六百四十年
弘法大師	千四年	遠生坊	六百四十年
小野小町	同	さいみやうじ	五百九十三年
なりひら	九百五十九年	しんらん上人	五百七十七年
大伴黒主	九百四十五年	日蓮上人	五百六十七年
菅丞相	九百三十六年	一偏上人	五百四十四年
まさかど	八百九十九年	楠正成	五百五年
つねもと王	八百八十一年	新田義貞	五百一年
小野道風	八百七十五年	兼好法師	四百八十九年
空也上人	八百六十一年	一休和尚	二百九十四年
元三大師	八百五十四年	武田信玄	二百六十二年
紫式部	八百四十九年	けんしん	二百六十一年
多田満仲	八百四十四年	豊臣秀吉	二百四十一年
安部晴明	八百三十四年	加藤清正	二百二十八年
清少納言	八百四年	義士四十七人	百三十六年

こ二十三 弘法大師四目録占

八卦図	離	坤	兌	乾	坎	艮	震	巽
得物	をそし	少しあり	あり	あり	なし	おそし	おさまる	なし
待人	すこやか	きたる	きたらず	おそし	きたる	きたらず	きたる	をそし
出行	くゆる	よろこぶ	よろこぶ	よろこぶ	はんよし	よろこぶ	きたる	をそし
生子	おとこ	をんな	をんな	をんな	おとこ	をんな	おとこ	おとこ
善悪	あし	よし	よし	あし、	よし	あし、	よし	あし、
一二を指	一よし二半	一半二半	一よし二あし	一よし二よし	一よし二半	一よし二よし	一よし二よし	一あし二よし
月を指	来月	今月	今月	来月	今月	今月	今月	来月
生霊	女の生霊	女の死霊	女のれう	女のれう	女の生霊	女の	いきれう	いきれう
死霊	ほどけ●	山の神	ふちやう	かみほどけ	あやれう	ゆみや	ほうし	ほうし
病事	よし	ながびく	火事	よし	をそし	少しよし	をそし	少しよし
呪咀	くわうじん	ほうしのらふ	三ほうやじやう	くほうじんだる	万事よし	くわうじん	女ののらふ	女ののらふ
方角	西北	南北	東北	東西	北西	南西	北南	西北
時を指	己未	寅申	寅卯	申辰子	子丑寅	未午申	子卯午	寅卯午
軽重	おがやうがやう	かろし	かろし	かろし	をもし	かろし	おもし	おもし
朱物	失す出す	人かくす	人かくす	かくす	うせす尋べし	人取んにおす	失すかくす	うせすかくす
見物	ゆみや	くぜつ	神よし	くぜつ	仏よし	ぬす人	くぜつ	火事
生死	死	生	生	生	死	生	死	死
物色	白し赤し	黄白	青黒	白黒	白黒	黒赤	赤白	黒赤
二足／四足	四足	いなり	四足	四足	足なし	二足	四足	二足
勝負	かつ	さき二かつ	まける	かちても半よし	半よし	かつ	半吉	かつ
夢見	出家女	よし	女ぜん人	弁才天	女を得る	むまたつミ明	おどろくこと	出家女

このうらなひうらなハせる人の
としの数と月と日の数を
あハせ惣数二十にならバハツづゝ

はらひ二十八はらひ引て

のこり四ツを八卦の数にてミレ

ハ震の卦也是を横にくりて品

じな其吉凶を知るべし

離三 坤八 兌二

乾一 坎六 艮七

震四 巽五 【此数を前の図に／引合すべし】

こ二十四 暦の中段にて雨天をしる事

○ひらくの日降出したる雨ハすみやかに日和なり

○とづの日の雨曇天にしてむすごとし

○おさんの日の雨ハ大に永降なり

天気ハはかり定めがたしといへ共右の三ケ日の雨ハあたら

ずといふ事なし考見るべし

て一 天地和合日

正七【いぬ／ね】二八【ミ／ひつじ】三九【いぬ／ね】

四十【ミ／ひつじ】五十一【いぬ／ね】六十二【ミ／ひつじ】

右大吉日也万よし

四日 十日 十六日 二十日 二十四日 晦日

丙子 癸丑 甲寅 乙卯

壬辰 戊戌 丙午 庚申

辛未 癸酉 丙戌 戊卯

右ハあしき日なり

て二 手形証文取遣の事

吉日 曆中段 さだん なる 此日よし

凶日 甲【さる】 乙【とら】 丙【ね】 丁【ゐ】 戊【とら】

己【う／ミ】 庚【むま】 辛【ミ】 壬【たつ／いぬ】

癸【うし／ひつじ】

曆中段【やぶる／あやぶ】 同下段【ぢう日／ふく日】

て三 天悦日 此日神仏供養によし

春【むま】 夏【うし】 秋【たつ】 冬【ひつじ】

て四 手の筋占ひ

それ手ハ一身より万事の用を

便ずる処なれば自然と掌中に

一身の善悪の紋理をあらはせり

先手の内のあつきハ自分の力

にて財宝をまふけ又手の甲の

内あつきハ親の家督他のゆづり

など請る相なりやハらかにして

筋の多きをよしとす

此天地人の三紋正しきを妙とす・

ゆびハ長く掌ハ短きをよしとす

・ゆびハ肉あつてまたのすかざるがよし

・筋あさきハ下こん也筋ふかきハこん

きつよし筋のなきハ下賤なり

・俗にますかき筋あるひハ百握

と云もの大によろしからず一度ハ

家をやぶるか家業定りがたし

・ゆびハ丸く肉あつて先ほそきを

よしとす・ゆびさきふとく槌の

ごときハ愚にして貧也・ゆびは

春の土子の竹の子のごときハ

大によし・ゆびの内によこ筋

三すぢあるハつね也すぢ多きハ

けんぞく多く發達す・ゆび

の内の横筋多きハ師匠と成

相なり・貝爪といふて小く

みぢかきハ貧にしていやく

下賤の相なり・椎爪とて

ほそくながきつめよし・

爪ゆびにそふてうつふくは

おろかにして貧なり・

爪四角くあつくひらたき

ものハぶきやうなるうまれ

じやうなり・つねに爪を

かミ切ものハ小兒は痲病也

大人は發達せず孤独に

して若死なり・天紋ハ
家業を見定る紋なり長く
ひとさしゆびの下まで通る
をよしとす二筋有ものハ
別に家業を兼る也・人紋ハ
自身の事を身定べし長
きハこんきつよしみちかきハ
こんきよハく物を仕とげず
・地紋は根本を見定るなり
ながきハいのちながし
三紋ともそろひたるを
よしとす・俗にいふきう
せんすちといふハけつして
●なんの事ならずミな
たゞ家業立がたく一度は
家をやぶるなり●なんとハ
跡かたもなきことなり・
天紋のさきまたになりしハ
家ぎやうをあらためかへし
人なり・天紋のなき人は
むげいにして家ぎやう定ま
りがたし・人紋なき人

は一生名をなさず心かいな
し・人紋に横切あるハ名
をさまたぐる人なり・人紋
また有人ハ養子にゆく也・
地紋坎宮へつらぬくハ長
寿なり・地紋右二重る
ものハ他家さうぞくする
也左に重るものハ多芸也
親の家を受つがず・三紋
の間に横紋あるものハけん
そくも多く目上の人に
ちかづき仕合すべし
八宮の図
家宅紋
俗に●かき筋と云也
家宅紋あるハ家屋敷多く
もつ也真の枡かき筋と云
ものもあるひハ田字紋とて
田かくのとき紋ある人ハ
田畠山林を多くもつなり
・六花紋八花紋などある人ハ
大に発達すべし・坎宮に

入字人字の紋ある人ハ官位

昇進發達するなり・兎宮

に十字紋ある人ハかならず

他家さうそくすべしまた

書をよくかく人なり兎宮

の縫のよこすぢハ手を能

かくすぢなり・兎宮の

縫のよこすぢ二筋有ハ妻

二人めにておさまり三筋有ハ

三人までかハる也如此は妻女

死別也・坤宮の縫の横筋

ハ子の筋なり子の育つ

数ほどすぢ有なりと知

べし・人指とハひとさし

ゆび也中指とハ高ゆびなり

食指とハ紅さしゆびなり

無名指とも薬指とも云なり

て五 伝授事三十條

早天に草に露あれバ一日ひよりよし又草の根元に露た

まりあれバ其日雨降しるし也

油おとしの法ハ何にても油のかゝりたる物に石灰をふり

かけ其うへゝ火のしをつよくかけおもしをかけおくべし油跡な

く落る也又大根おろしにて洗ひてもよし

硯を急に洗ふにハ生の大根にてこするべしさすれば墨ことくく

落て硯にきずつかず

板に墨のついたるハ塩をつけて指の腹にてこするべしまた

大根の香の物を二ツに切てこするべし

きせるのやにのついたるハ味噌汁のあつきにて洗ふべし

絹木綿紙等に墨のついたるをおとすにハ生姜のしほり汁

となま味噌と大根おろしにて洗ふべし紙に墨のついたるハ

大根をうすく切下に敷紙をのせ上よりまた大根にてたゝくべし

何返もかへてかくすればバすミおつる物也

朝顔の花飛入紅に咲せやうハ朝がほのつぼミへ酢をちよぼく

とつけ置バ飛入紅にさくなり

萩の花藤の花久しく活置んと思ハゞ熱湯に活おくべし

二三日してもしほるゝ事なし但し是ハ百滾湯とて湯を

たぎらして其後よくくさまし置て活る也元湯へ直に

活てハ花しほるゝ也

河骨を活るにハ茎の本の切口よりやうじにて穴をつき中へ

麝香を少しさしこむべし

蓮の花を久しく活るにハどろ水の日なたにてぬるミたるに活

置べし冷水ハわろし

絹の血の付たるにハ人の乳にて洗へバよくおつる也生姜の絞り

汁にても大低ハおつるなり

衣類に鳥もちの付たるを落すにハ其つきたる所へからしの粉を

ふりかけ置バとりもちことくまき上りおつる也

大風の吹を知にハ鳶鳥至て高き枝に巢をかくる年は

風なし低きえだに鳥の巢かくるとしハかならず大風

吹としるべし

草花を植替るにハ是まで生ありし根の土際より一寸さ

がりに間をおきて植べし

樹木を植るにハ是迄の土際より一寸ふかく土をきせて植れ

バよくつく物也草木共に植て水をかくるハあしくしほれ

たるまゝにして置べし其夜の露をうくれバいつきりと

なる也

松の背低くさかふる伝は松を植るとき根の下へ平なる石か

瓦を置いて植れバ必横へさかへはびこるなり

松を鉢にそだつるにハ鉢植の松を十月頃より掘おこし根を

ふるひ古土を去屋根板の至極ふるびて年経しを粉になし

砂と黒ぼこに合せ植べし又にかハを二三本折て入るかよし

川芎ハわろし水ハ日に一度かけてよし日のつよくあたらぬ

やうに北うけの風をうくべし

雷除の法ハ端午正昼時草浮萍を取てかげばしにし

雷の鳴るとき焚べし

松南天よせ接の法ハ松にても南天にてもよせつぎにするハ両方

のつぎ合す処をけづり玉子のしろミをぬり竹の皮にて

しかと巻一月程して切て半月程あつて竹の皮をとるべし

油紙傘などに文字書法ハ生松葉手一束を五分斗に切一夜

水にひたし其水をすみにすりて書べし油はぢかず

漆金箔などの上に文字書にハ生松葉一つかミ横槌にてよく

打一昼夜水にひたし其水にて墨すりて書べし

いかの墨にて書たる文字ハいつとなく消る也夫を酒につく

れバふたゝび文字あらハるゝなり

て六 天一神【并天一天上日取の事又俗に天一太郎／とて天一天

上の日ふれは必永雨となる也】

天一神は帝釈天の有司として三界をめぐり人間の

善悪を記して帝釈に申す天一神の臣下に日遊善神

とてこれあり天一神天上し給ふときハ日遊神下界に

下りて人の家を我家とする神にて不浄を嫌ふゆへに

天一天上十六日のうち万事清浄なるべしふ浄なれば

日遊神崇をなす也心を分て潔くもつべし又家を崩し造作

をいむべし癸巳の日より天一天上し十六日を経て下界に

帰りまた日遊神天上する也此十六日の内鹿狩鷹狩

川狩などをいむなり癸巳の日より天にのぼり戊申の

日降り給ふ也此間十六日を天一天上と云もつとも

巳酉の日降りて地に有事四十二日その方角庚戌の

日より甲寅まで五日が間良の方にあり己卯の日

より巳未迄五日が間東に

あり是に准じ余ハ図を
もつて知べし

天一天上

此方万事に忌べし

軍陣を出せバ弓

矢おれ産婦

此方に向へば死

傷の愁立所に

いたる恐懼べし

て七 天地昼夜の図

天に昼夜なし日輪大地のかげに

入地日にそむく所ハ夜となり

日に向ふ所ハ昼となるなり

月もまたおなじことにて

日の光をうけて照るなり

日と月と正対して正面に

日の光をうくるとき満月

なり是を望といふゆへに

半面照る時ハ弦月なり

余ハこの例にてしるべし

心をとむれば吞込ること也

て八 新始の事

まづ吉方にむかひて曲尺をとりなをして暫く立迷故の文
をとなへ悪魔を降伏し天魔外道を退治し其後鉞を打べし

一番鉞【下中】二番鉞【上中】三番鉞【中中】

打留て真向になをり一度拝しもの如く鉞を直し

置尺を取なをし唱る文に曰

迷故三界城 悟故十方空 本来無東西 何処有南北

謝辞

本翻刻をなすにあたり、篠田健一氏に数多御教示いただいた。
ここに記して感謝申しあげる。

註

伊藤孝行（二〇二二）翻刻『万代大雑書古今大成』（十二）、「メ
ディア・コミュニケーション研究」七五、一―十九頁

